

## 「愛瀨詩」とは

(1) 古田武彦『真実の東北王朝』(下記URLをクリック)より引用

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/2011/10/post-67ff.html>

(文中の太字は引用者による)

### 敬称として使われた「えみし」

では、「えみし」とは。これが、新しい課題だ。『日本書紀』の神武紀に、有名な一節がある。

愛瀨詩烏えみしを毘儂利ひだり毛毛那比苔ももなひと比苔破易陪迺毛ひとはいへども多牟伽毘毛勢儒たむかひもせず

(「ひだり」は“一人”。「ももなひと」は“百ももな人”。岩波『日本古典文学大系』本による。二〇五ページ)

この「愛瀨詩」は、**神武の軍の相手方、大和盆地の現地人を指している**ようである。岩波本では、これに、「夷えみしを」という“文字”を当てているけれど、これは危険だ。なぜなら「夷」は、例の“天子中心の夷蛮称呼”の文字だ。このさいの“神武たち”は、外米のインベーダー(侵入者)だ。「天子」はもちろん、「天皇」でもなかった(「神武天皇」は、後代(八世紀末~九世紀)に付加された称号)。

第一、肝心の『日本書紀』自身、「夷」などという“差別文字”を当てていない。「愛瀨詩」という、まことに麗しい文字が用いられている。これは、決して“軽蔑語”ではないのだ。それどころか、「佳字」だ、とわいていい(「瀨」は“水の盛なさま”。彼等は“尊敬”されているのだ。

さらに、内容も、そうだ。

“この「えみし」は、一人で百人に当るほど強い”

とわいて、**その武勇をほめたたえている**のだ。もちろん、その結論は、

“そんなに強い、といわれる彼等さえ、わたしたち(神武の軍)には、全く抵抗さえしなかった”

という、自己賛美、いわゆる“手前味噌”に終わっている。しかし、その前提をなす「えみし」観、それは、以上のようだ。「軽蔑」でなく、「敬意」なのである。——これは、何か。

(青森市の「市民古代史の会」(三内、鎌田武志氏方)は、その会報(月一回)を『愛瀨詩』と題しておられる)。

(2) 「生駒検定<全国版>」(下記URLをクリック)の「<問17>『生駒』の語源・由来」の問題文より引用

<http://c1.cocolog-nifty.com/blog/files/19.pdf>

**縄文時代に生駒付近に住まいしていた人々(縄文人)**のことを日本書紀は**愛瀨詩(えみし)**と呼んでいる。これは、三文字とも麗しい文字を使用しているように尊称である(「瀨」は水の盛なさま、「詩」は志が言葉となったもの、という意で、愛瀨詩とは、愛のみちわたる言葉を話す人々という意味になる)。日本書紀は愛瀨詩を「**一人で百人に当るほど強いが、戦わない人々**」と畏怖・畏敬の念を持って紹介している。